

英文要約指導法の定式化に向けた基礎研究

山岡 大基

要約文の作成は英語の指導・学習において広く取り入れられている活動である。文章のあらましを簡潔にまとめる言語技術自体は実社会でも要求されるものであり、有用性があることは言を俟たない。くわえて、要約文の作成が必然的に原文を丹念に読むことを要求するため、読解力育成のための道具として要約を用いることも一般的である。しかし、適切な要約文の作り方の指導法については、英語教育においてははまだ客観的で汎用性のある方法が確立していない。そのような指導法を確立するためには、前提として英文を適切に要約する方法を、まず定式化する必要がある。本稿ではこの点について、国語教育や日本語研究において得られた知見を応用することにより、理論的基盤を整えることを試みる。

1. 英文要約指導の問題点

1. 1. 用語の未整備

「要約」と類似の用語に「要点」および「要旨」がある。英語では“summary”, “main point(s)”, “main idea(s)”, “gist”, “outline” など関連した用語がある。しかし、英語教育においてこれらの用語が厳密に使い分けられることはまれである。そのため、どのような要件を満たすものを適切な要約文と捉えるのが、あいまいにされてきたきらいがある。

これらの用語の相互関係について、白石 (2006) は次のようにまとめている。

要点とは、段落の中で筆者が述べようとしている主要な内容である。重要な文や言葉をもとにして、短くまとめたものを言う。要旨は、文章全体の中で筆者が述べようとしている内容の中心であるが、要点は段落の中のポイントと考えればいい。(17)

要約とは、文章全体のあらましをまとめることを言う。このことを文学的文章で言うと「あらすじ」にあたる。

(中略)

要約をもっと簡単にとらえるならば、文章を要約するといった場合、それぞれの段落の要点をつなげて文章化したものというようにとらえていいのではないだろうか。それぞれの段落の要点をおさえながら、一つの文章にまとめていくことを要約文にしていくこともある。ここで大切なのは、文章全体の要約は、「要旨」をふまえた文章のあらましをいうこととなる。

文章を要約するということには、それぞれの段落の要点をまとめることが必要となってくるのである。(23)

要旨とは、筆者が文章全体で述べている考えの中心となるものである。文章を書く側の筆者は、この要旨が先にあつて、これを詳しく述べていくためにさまざまな例を挙げて分かりやすく書いているのである。(35)

本稿ではこの整理に基づき、「要約：要点を要旨に沿って整理し文章化したもの」と定義する。

1. 2. 客観性の不足

白石 (上掲) は要約の方法として次の2つを提示している。

(1) 「要点」をつなげた要約文を書く。

(2) 要旨を踏まえて、簡潔にまとめて要約文を書く。白石は、(1)が要約文を書く際のもっとも基本的な方法であると、この方法への習熟を踏まえたうえで(2)の方法を取り入れることを提案している。

高等学校レベルの英語教育においても、これと同様の発想に基づく方法が提案されている。たとえば「ライティング」の検定教科書である *Pro-Vision English Writing New Edition* (2009年版) では「文章を要約するときの手順」として次のような方法が紹介されている。

1. 各パラグラフ (段落) で最も重要な情報を表す文を探し、抜き出す。
2. 各パラグラフで次に重要な情報を表す文を探し、必要があれば抜き出す。

3. 1, 2で抜き出した文を中心にして文章全体の話の展開を考える。
4. 文章の展開に合わせて要約文を作成する。書こうとする要約文が短い場合は情報を加えていく。長い場合には表現を圧縮してみる。
5. 適切なつなぎ語を使って全体をまとめる。
6. 要約文を書いたら、見直しをして、重要な情報以外のものや自分の意見がないか確認し、もしあれば削除する。(89)

手順の1・2が要点に関わるもの、3・4が要旨に関わるもの、5・6が文章化に関わるものという関係が見て取れる。

このような要約の方法は、たしかに妥当性の高いものである。なぜならば、それが「要約」の定義を直接的に具現化したものだからである。しかし、それは論理上当然のことであって、これをもって要約の方法が定式化されたとは言えない。¹⁾個々の手順を正確に遂行する具体的な方法が明確でないからである。

そのような問題点のうち最大のものは、要点の把握が正確になされることを前提としていることである。パラグラフ間の関係や文章構成を正確に把握するためには、各パラグラフの要点が正確に把握できていることが前提となる。すなわち、各パラグラフでの要点の把握に失敗していたならば、その要約文は適切さを欠くことになる。

要点を正確に把握するための方法が提案されていないわけではない。たとえば、パラグラフの主題文(topic sentence)を要点と考える方法や、談話標識(discourse marker)を手がかりに要点を判別する方法などである(福崎・米山, 1999など)。

しかしながら、主題文という概念は英語教育の文脈ではあいまいにしか定義されていないという問題がある。

(山岡, 2008)たとえば、ある文が主題文だと言う場合、その文が主題文だから重要な情報を担うのか、重要な情報を担うから主題文とみなされるのかの区別は自明ではない。また、主題文の位置についても、パラグラフの冒頭・中間・末尾のどの場所もありうるものであることも考慮すると、「主題文」を、要点を判別するための客観的指標として機能させることには無理がある。

いっぽう、談話標識については、たしかに重要な情報を判別するための客観的指標として機能させることはできる。しかし、談話標識による明示的な指示がないままに要点が述べられるパラグラフもあり、それらは決して一部の例外ではない。

要するに、上述の方法では、文章の意味が適切に理解できなければ要点も把握できない点の問題なのである。もちろん、要約に文章の意味処理が深く関わること自

体は当然のことである。しかし、学習場面を考えたとき、要約文を作る以前に要点を把握することに困難を感じる学習者は少なくない。そのような学習者にとっては、いかに上述のような方法に忠実に従ったとしても、結果として出来上がる要約文が不十分なものになることは避けられない。出発点である要点の把握に失敗しているからである。

そのような学習者に対しては、学習者自身の読解力になるべく依存しない、より客観的な指標に基づく要約の方法が提供できるのであれば、それが望ましい。じっさい、そのような方法を探る試みが、国語教育や日本語研究においてなされている。次節ではそれらの試みについて述べる。

2. 要約文作成における客観的基準

2. 1. 主核・述核・補核

横山(1990)は、小学校国語科での実践をもとに、30字以内の要約文を作成する方法について、次のような公式を提案している。

- 公式1 主語をピックアップし、主核(一番重要な主語)を見つける。
- 公式2 述語をピックアップし、述核(一番重要な述語)を見つける。
- 公式3 補核(主核・述核の次の重要な語句)を、一つ二つ見つける。
- 公式4 語核²⁾を並べ換える。
- 公式5 新たな一文を作る。

この方法で特徴的なのは、要点を選び出す段階から、主語・述語・その他という文の構成要素ごとに検討を行っている点である。これは、要約が文の形式で表されることを踏まえての方法であるが、漠然と要点を探すよりも検討の焦点が明確になるため、よりの確に要点を把握することが可能になると考えられる。

しかし、ある語は「語核」と判断され、別の語はそうではないと判断される場合、その判断を分ける基準については、横山(上掲)は「重要な語句」と述べるに留まっている。どのような条件を満たせば、ある語句が「重要である」と判断されるのかについては、客観的な指標が与えられていない。

2. 2. 反復距離・区間密度・全体密度

どのような語句が重要であると判断され要約文に含められるかについては、馬場(1989)が日本語における要約を対象として調査を行っている。

馬場は、「反復語句」に着目し、原文に用いられた反

復語句と、要約文におけるその残存傾向を分析することにより、要約文の作成者がどのような情報を要約文に含めるべき重要なものと判断しているかについて客観的な指標で表すことを試みている。(以下の引用中の「系列」とは、「『反復語句系列』すなわち、同一の反復語句のひとつつながりのことである」(45)と定義されるものである。)

「反復語句」とは、「文章中の異なる文に二度以上出現する同一語句ないしは同義・類義の語句(付属語・感動詞・接続詞・連体詞・形式名詞・補助用言・指示語句は除く)」である。ただし、「ある・いう・ところ・もの」などのように、どのような文章にも数多く出現し、したがって、その文章の特徴的な語句とはなりえないような「無性格語」は、「反復語句」に含めない。(35)

反復語句には、上述のように、重要度の違いが考えられるが、こうした重要度を、直観的・主観的判断で行うのではなく、形式的に判定しようとする、その判定の目安として、次の3つの指標が考えられる。

- (1) 反復距離(その系列に含まれる反復語句の出現区間[範囲]の長さ……初出の文と最終出現文との間の文数)
- (2) 区間密度(その系列に含まれる反復語句の出現区間[範囲]内での出現回数の多さ)
- (3) 全体密度(その系列に含まれる反復語句の、文章全体からみた出現回数の多さ)

この3つの指標に注目すると、反復距離が大き、しかも全体密度が大きい反復語句系列は、文章全体にわたって何度も繰り返し用いられている反復語句の系列ということになる。このような系列に属する反復語句は、文章全体の話題を示す可能性が極めて高く、重要度の高い系列であると想定される。ここでは、このような反復語句系列を「主要反復語句系列」と呼び、この系列に属する反復語句を「主要反復語句」と呼ぶ。

また、反復距離が中くらいで、しかも区間密度が大きい反復語句系列は、文章のある一部分に集中的に繰り返し用いられている反復語句の系列ということになる。このような系列に属する反復語句は、文章のある一部分の小話題を示す可能性が高く、文章全体から見た場合、重要度のやや高い系列であると想定される。ここでは、このような反復語句系列を「部分反復語句系列」と呼び、この系列に属する反復語句を「部分反復語句」と呼ぶ。(36)

馬場はこの枠組みを用いて、日本語の文章を日本語で要約したものにおいて、原文中のどのような語句が要約文に残りやすいかを分析した。その結果、要約文の作成について、次のような結論を導いている。

本章の考察を要約文の作成方法という点から見直すと、原文中の主要・部分反復語句を手がかりに、その文章の中心的话题や小話題を押さえることができるが、主要・部分反復語句のすべてを要約文に使うというだけでは、不十分であり、その主要・部分反復語句がどのような役割・性質の文に出てきているのかという点から選択を行い、さらに、文脈の流れを維持するために、どの程度の長さで用いるのかということも考慮する必要があるということになる。

このことは、反復語句の分析が要約文の分析にとって、ひとつの観点となりうることを示すと考えられるが、反復語句のみの観点だけ、また、この観点の形式的な適用だけでは、不十分であり、他の分析観点との併用が必要であることも示している。(45)

3. 英語教育への応用に向けた理論的整理

本節では、前節で見た日本語における要約の研究や教育実践から得られた知見を、英語教育における要約指導に応用するために、まず、理論的に予測されうる課題を整理し、そのうえで実際的な応用の可能性を探る。

3. 1. 言語的差異の影響

横山(上掲)の方法については、日英語の言語的差異について注意を払う必要がある。特に慎重な扱いを要するのは、「主核」である。横山の主張する方法が有効でありうるのは、日本語の主語が話題主語(topical subject)の性質を強く持つからである。つまり、文の主語がその文章で述べられている何らかの話題を表す度合いが高いために、主語だけを抜き出して検討することが有意義なのである。

いっぽう英語の主語は文法的主語(grammatical subject)の性質が強い。つまり、意味よりも文法的必要性が優先されて主語が選択されるために、たとえば形式主語や虚辞(expletive)が頻繁に使用される。そのような環境において主語だけを取り出しても、要約文に含めるべき重要な情報を網羅できない可能性が高い。

この問題に対処するためには、横山の枠組みに沿うならば、「補核」の役割を重視する必要がある。すなわち、英語では文法的主語以外の要素が重要な情報を担っていることが少なくない(e.g. 形式主語 it に後続する to 不

定詞) ため, そのような要素に着目することを方法として定式化しておくべきである。

3. 2. 原文の性質による影響

馬場(上掲)による反復語句に着目した方法については, 馬場自身が指摘しているように, その他の方法を併用する必要がある。原文の分量が過多でなく, パラグラフ内の構成やパラグラフ間の関係が明確である場合は, 取り立てて反復語句に着目するよりも, 1.2 で取り上げたような方法に従うほうが, 適切な要約文をより平易に作ることもできるかもしれない。

4. 英文要約方法の定式化試案

前節での整理を踏まえ, 英語で書かれた文章を要約する方法の定式化を試みる。その際, 1.1 での整理に基づき, 次の3つの観点を設定する。

- (1) 要点
- (2) 要旨
- (3) 要約(文章化)

4. 1. 要点

要点の把握は, 1.2 で述べたように, 適切な要約文を作成するうえで, 決定的に重要な過程である。ここに, 2 で取り上げた2つの方法を適用する。具体的には, 次の手順を設定する。

- (1) 主語名詞句と述語動詞(助動詞を含む)を全て抜き出す
- (2) 主要反復語句と部分反復語句を抽出する

ここで列挙された語句の中から「要旨」に沿うものを抽出し, 要約文に含めることになる。

4. 2. 要旨

要旨は, 白石(上掲)の定義に従えば, いわゆる主題文の表す内容に近いものとなる。とすると, これまでもなされてきた主題文を探す方法が効果的に活用できることになる。具体的には, 次のような手順を踏むことで要旨の把握が可能になると考えられる。

- (1) パラグラフ内の冒頭か末尾の文が主題文であると仮定する
- (2) (1)で仮定した主題文がそのパラグラフの内容をよく表すものであるかを検討する
- (3) 談話標識を手がかりにパラグラフ構成を分析し, (1)で仮定した主題文が本当に主題文であると言えるかを検討する

場合によっては(1)での仮定が(2)(3)で否定されることもありうる。

1.2 で指摘したように, 主題文という概念自体が十分に定義されているとは言えず, 客観的指標によって主題文を同定することは不可能である。しかしながら, それゆえに主題文という概念の価値そのものが失われるわけではない。その限界を認識しつつ活用する限りにおいては, 各パラグラフの主たる意味内容を検討するのに役立つため, 要旨を把握するのに有効な概念である。

4. 3. 要約(文章化)

1.1 で定義したように, 要約とは要点を要旨に沿ってまとめたものである。つまり, 適切な要約文を作成するためには, その「まとめ方」が適切でなければならない。

文章から抽出した要点を要旨に沿って文章化する際, 検討しなければならないのが, 原文の文章構成, つまりパラグラフどうしの結びつき方や配列の仕方である。文章構成にはいくつかの種類がある。たとえば, 次のようなものである。

- ・頭括型
- ・尾括型
- ・双括型
- ・起承転結型
- ・時系列型
- ・列挙型
- ・帰納型
- ・演繹型

これらの文章構成は相互に独立したものではなく, 重複しながら1つの文章に表れる場合もある。

要約文とは, ある文章の「あらまし」を伝えるものであるから, 原文の構成を要約文の構成にもできる限り反映させることで, その目的がよりよく達成されると考えられる。

5. 試案の試行

前節までで検討した英文要約の方法を, 実際に運用し, 適切な要約文が生成されるかの理論的試行を行う。題材は東京大学入学試験における要約問題(2008年度)を取り上げる。³⁾

(1) 原文

次の英文の内容を, 70~80字の日本語に要約せよ。句読点も字数に含める。

One serious question about faces is whether we can find attractive or even pleasant-looking someone of whom we cannot approve. We generally give more weight to moral judgments than to judgments about how people look, or at least most of us do most of the time. So when confronted by a person one has a low moral opinion of, perhaps the best that one can say is

that he or she *looks* nice – and one is likely to add that this is only a surface impression. What we in fact seem to be doing is reading backward, from knowledge of a person's past behavior to evidence of that behavior in his or her face.

We need to be cautious in assuming that outer appearance and inner self have any immediate relation to each other. It is in fact extremely difficult to draw any conclusions we can trust from our judgments of a person's appearance alone, and often, as we gain more knowledge of the person, we can discover how wrong our initial judgments were. During Hitler's rise and early years in power, hardly anyone detected the inhumanity that we now see so clearly in his face. There is nothing necessarily evil about the appearance of a small man with a mustache and exaggerated bodily movements. The description would apply equally well to the famous comedian Charlie Chaplin, whose gestures and mustache provoke laughter and sympathy. Indeed, in a well-known film Chaplin plays the roles of both ordinary man and wicked political leader in so similar a way that it is impossible to tell them apart.

(2) 「要点」

(2-1) 主語名詞句と述語動詞の抽出

主語名詞句は以下のとおりである。ここでは、従属節の主語も含めている。

- 第1文： one serious question, we
- 第2文： we, most of us
- 第3文： one, the best that one can say, he or she, one, that
- 第4文： we
- 第5文： we, outer appearance and inner self
- 第6文： it, we, we, we
- 第7文： anyone, we
- 第8文： nothing necessarily evil
- 第9文： the description, whose gestures
- 第10文： Chaplin, it

意味上の重要性はともかく、頻度に関しては、“we” や “one” といった、一般論を述べる語が頻出していることがわかる。

次に、述語動詞は以下のとおりである。

- 第1文： is, can find, cannot approve

第2文： give, look, do

第3文： confronted, has, can say, looks, is likely to add, is

第4文： seem to be doing

第5文： need to be, assuming, have

第6文： is, draw, can trust, gain, can discover, were

第7文： detected, see

第8文： is

第9文： would apply, provoke

第10文： plays, is, tell

“find” と “discover” に類義関係が認められる以外は、頻度の高い語はない（be 動詞は除く）。

(2-2) 主要反復語句の抽出

反復語句の出現箇所・出現回数・反復距離・区間密度・全体密度は表1のとおりである。⁴⁾

この分析によると、全体密度の高い “face / appearance / how people look” および “judgment” が主要反復語句、その他のものが部分反復語句であると判断される。

(3) 「要旨」

原文の文章構成と内容を分析すると、次のことがわかる。

第1パラグラフ：第1文で、「好きではない人物の顔を肯定的に評価することがありうるか」という問いが発せられている。これに対し、最終文では、「その人物の過去の行状に沿う特徴を顔から読み取る」と結論付けられている。つまり、第1文の問いに対する答えは「否」であることがわかる。途中の文は、この論旨を説明する内容を持っている。

第2パラグラフ：第1文では、「外見と内面に直接的な関係はないことに注意すべきだ」という主張が述べられている。これに対し、最終文では、「チャップリンの演じた2役は、外見上見分けがつかない」という具体例が挙げられている。この具体例は第7文から始まる。その直前の第6文では、「外見からだけで内面を判断することは困難である」および「その人のことがわかっていくにつれ、第一印象が誤りであったことがわかっていくことが多い」という主張が述べられている。

これらのことを総合すると、原文の「要旨」は次のようなものになる。

- ・好きではない人物の顔を肯定的に評価することはない。
- ・その人物の過去の行状に沿う特徴を顔から読み取る。

表 1. 東京大学 2008 年度問題の反復語句分析

反復語句	出現箇所 (文番号)										出現回数 (回)	反復距離 (文)	区間密度 (%)	全体密度 (%)	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10					
face / appearance / how people look	1	1		1	1	1	1	1				7	7	100	70
moral		1	1									2	1	200	20
judgment		2				2						4	4	100	40
knowledge				1		1						2	2	100	20
Chaplin									1	1		2	1	200	20
bodily movement / gesture								1	1			2	1	200	20
mustache								1	1			2	1	200	20

- ・外見と内面に直接的な関係はないことに注意すべきだ。
- ・外見からだけで内面を判断することは困難である。
- ・その人のことがわかってくるにつれ、第一印象が誤りであったことがわかってくることが多い。

(4) 「要約 (文章化)」

以上の分析を踏まえると、反復語句のうち、主要反復語句である “face / appearance / how people look” と “judgment” は要旨に沿うものである一方、部分反復語句のうち、“moral” と “knowledge” は要旨に沿うが、“Chaplin”, “bodily movement / gesture”, “mustache” は、具体例に属する情報なので、要約文に含めるには適さないと判断される。

文章構成の面では、第 1 パラグラフは、パラグラフ内での結論が最終文に現れているのに対し、第 2 パラグラフは、結論が冒頭に現れて後半は具体例が述べられる構成になっている。原則的に要約文には具体例を含めないこととすると、要約文の構成としては、第 1 パラグラフ冒頭で導入される主題に対し、2 つのパラグラフそれぞれの結論を述べるようにすれば、原文に沿うものになると考えられる。すなわち、

主題：人物の外見をどのように評価するか
 結論 1：その人物について知っていることから判断する。
 結論 2：外見と内面は関係がない。

これを構成の概略とし、特に要点を表す語句がもれないように要約文をまとめるとよいと考えられる。

(5) 検証

以上のような分析が適切なものであったかを検証するために、3 つの大手予備校が公表している解答例と照合する。

河合塾

顔に対する評価は、相手の人格に関する知識に基づいている。見る側の認識に応じて相手の外見の印象が変わることも多いが、本来、人の外見と内面に直接の関係はない。(77 字)

駿台予備学校

嫌いな人の顔はその人の過去の行動を道徳的基準に照らして評価しがちだが、外見だけで決めるのは困難だし判断が変わることも多く、外見と内面の関係は慎重に考えるべきだ。

(80 字)

代々木ゼミナール

人の外見と内面に直接の関係はないのに、私たちは人の顔を、あるがままにではなく、その人の人となりについての自分の道徳的評価を反映させて見てしまうものだ。(75字)

要約文の構成は、順序の異同はあるが、3例とも(4)に示した構成をとっている。また、反復語句についても、(4)で含めるべきと判断したものについては、訳語の差異はあれ、いずれも含まれている。

以上のことから、本節で提案している英文要約方法は妥当なものであると判断される。

6. 今後の課題

もとより要約というのは人間の高次の認知活動であるから単純な定式化が困難であるのは言うまでもない。前節までの考察においても課題は皆無ではない。

まず、反復語句の分析の限界である。1つには、反復語句の分析には文脈上の類義関係の把握が要求されるが、これが必ずしも容易ではない。たとえば、前節で取り上げた原文においては、“cannot approve of”

と“have a low moral opinion of”は、文脈上同じことを意味しているが、語句の上は重ならない。そのため、反復語句の分析という手法では無視されてしまう。実際は、より平易なレベルであってもこのような言語的関係に気づくことのできない学習者がいる。したがって、当然のことながら、他の手法と補完しあいながら使用する必要がある。

また、文章の性質によっては反復語句の分析がほとんど用をなさない場合がある。たとえば、東京大学2009年度入学試験における要約問題では、次の文章が出題された。

When I was six or seven years old, I used to take a small coin of my own, usually a penny, and hide it for someone else to find. For some reason I always “hid” the penny along the same stretch of sidewalk. I would place it at the roots of a huge tree, say, or in a hole in the sidewalk. Then I would take a piece of chalk, and, starting at either end of the block, draw huge arrows leading up to the penny from both directions. After I learned to write I labeled the arrows: SURPRISE AHEAD or MONEY THIS WAY. I was greatly excited, during all this arrow-drawing, at the thought of the first lucky passer-by who would receive in this way,

regardless of merit, a free gift from the universe.

Now, as an adult, I recall these memories because I've been thinking recently about seeing. There are lots of things to see, there are many free surprises: the world is full of pennies thrown here and there by a generous hand. But – and this is the point – what grown-up gets excited over a mere penny? If you follow one arrow, if you crouch motionless at a roadside to watch a moving branch and are rewarded by the sight of a deer shyly looking out, will you count that sight something cheap, and continue on your way? It is dreadful poverty indeed to be too tired or busy to stop and pick up a penny. But if you cultivate a healthy poverty and simplicity of mind, so that finding a penny will have real meaning for you, then, since the world is in fact planted with pennies, you have with your poverty bought a lifetime of discoveries.

この文章について反復語句の分析をすると、表2のような結果が得られる。

表2. 東京大学2009年度問題の反復語句分析(抄)

反復語句	出現回数(回)	反復距離(文)	区間密度(%)	全体密度(%)
penny	7	12	58	58
hide	2	1	200	17
sidewalk	2	1	200	17
arrow	4	7	57	33
surprise	2	3	67	17
free	2	2	100	17
excited	2	4	50	17
see	2	1	200	17
sight	2	0	0	17
poverty	3	1	300	25
find / discover	3	12	25	25

この分析に従えば、“penny”や“arrow”が主要反復語句と判断されることになる。しかしながら、次のような解答例を見れば、その分析が不適切であることは明らかである。

河合塾

世界はささやかではあるが、無償で得られる驚きにあふれている。それを無視せず、積極的に価値を見出す素直な姿勢を育めば、発見に満ちた人生を送ることができる。(76字)

駿台予備学校

世の中は様々な驚きに満ちており、些細なものであっても、それが自分にとって意味を持つように純粋な心で見れば、発見に満ちた人生を手にしたことになる。(72字)

代々木ゼミナール

世界は小さな価値に満ちており、それに気づかない心は貧しいとしか言えない。ささいなものが持つ価値を求める純真で豊かな心を育てれば、人生は掘り出しもので一杯になる。(80字)

たとえささやかではあっても価値あるものは価値があると感じ取れる純真な心があれば、世界はこういう価値で満ちているので、生涯それを楽しむことができる。(76字)

このような事態が生じるのは、原文の論旨が比喻によって成り立っているため、実際に使用されている語句と、それらの語句を通じて筆者が表現しようとしている内容に乖離が生じていることによる。この問題は、文章構成の分析によっても解決が難しく、形式的な手法を一律に適用することの限界がよく表れている。

また、“hide”, “place”, “throw”, “plant” という4つの動詞が文脈上類義語として用いられているが、これほど多様な語句が類義関係を持つことも、形式的な分析を拒む要因である。

さらに、前節で検討した原文(東京大学2008年度)に戻ると、要旨を把握するために文章構成を分析する際にも、文章構成を正しく把握する力が求められる。たとえば、原文の第7文～第10文は具体例であるが、そのことに気づかず、この部分の情報を要約文に含めると、要約文は適切さを欠くものとなる。

以上のことを踏まえて、本稿で検討してきた方法を英語教育に応用する際には、要約の方法を知ったうえで、その方法を適用する練習を重ね、その過程で適切な要約文の作成方法を習得していくという発想が求められることになるであろう。

[注]

- 1) 「AするとはBとCをすることである」と定義づけられるAという行為について、「AするためにはBとCをすることが必要」と述べることは同語反復的である。このような要約の方法は、まさに同様の論法によるものである。
- 2) 「語核」とは「主核・述核・補核の集まり」と定義される。
- 3) 問題の指示文で用いられる用語は「要約」「要旨」「趣旨」など年度によって異なる。公式な模範解答や採点基準が公表されていないため、それぞれの用語に応じた異なる種類の解答が求められているのか、あるいは用語に関わらず同じ種類の解答が求められているのかは不明である。しかしながら、学習場面では、それぞれを厳密に区別せず、いわゆる「要約」として扱うことが一般的である。このような事情から、本稿でもこの問題を「要約」の問題であるとみなす。
- 4) 本稿における指標は次のとおりである。
出現回数：その語句や同義・類義語句が使用された回数の合計。
反復距離：その語句が最初に使用されてから最後に使用されるまでの文の数。
区間密度：出現回数を反復距離で割ったもの。
全体密度：出現回数を原文の全文の数で割ったもの。

[引用文献]

- 荻野治雄・Simon Sanada・八田玄二・馬場哲生・藤田真理子・矢野淳(2009) *Pro-Vision English Writing New Edition* 東京：桐原書店
- 白石範孝(2006) 『要点・要約・要旨の基礎的学習で読解力を育てる』 東京：学事出版
- 馬場俊臣(1989) 「原文と要約文の反復語句」 佐久間まゆみ『文章構造と要約文の諸相』 pp.35-46 東京：くろしお出版
- 福崎伍郎・米山達郎(1999) 『記述(要約・説明)問題のストラテジー』 東京：河合出版
- 山岡大基(2008) 「『トピック・センテンス』とは何か」 http://hb8.seikyoku.ne.jp/home/amtrs/topic_sentence.html
- 横山駿也(1990) 『力をつける説明文の解読法』 東京：明治図書